人口問題研究所
研究資料 第六八號

アメリカ南東部地方の高出生率に關する研究

昭和二六年三月一日

厚生省人口問題研究所

はしがき

本輯はミルバンク記念財団季報第一九巻第四号（一九四一年一〇月）所收の論文「高出生率研究の地域的方法」The Regional Approach to the Study of High Fertility, by Rupert B. Vance を翻訳したもので、青木技官の執筆による。なお、この論文はノースカロライナ大学社会科学研究所の計画している南部人研究の一環をなすもので、ミルバンク記念財団第一九回年次会議の席上で朗読されたものであり、本文中のすべての統計的計算は右研究所の統計助手ナディア・ダニレフスキーの手による旨附記されている。

昭和二十六年三月一日

人口問題研究所

目次

第一部　人口學的樣相……一頁
南部の特別の高出生率の要因……一頁
地域的多産率……四頁
婚姻の予想確率……五頁
一九二〇年―一九三〇年の出生低下……七頁
一九二〇年及び一九三〇年に於ける南東部の出生率に及ぼす死亡の影響……九頁
一九三〇年―一九四〇年の地域的変化。自然増加対移住……一一頁
第二部　文化的研究……一四頁
生活の基準……一五頁
性的態度……一九頁

高出生率研究の地域的方法は我々社会人口学者の手による科学的結合の最も幸福なるものの一つ、即ち統計学と地理学の間のそれを証明した。それは量的尺度特に妊孕年令婦人一〇〇〇に対する乳兒の比率の使用によつて、過剰出生地域の限界を定め、一世代に亘る現在の出生及び死亡の作用の條件の下で純置換率を提供したのである。これらの研究は、高置換率をもつ主要地域は、人口と資源の効率的使用の関係に基き測定された高い経済密度の地域と一致する傾向にあることを示している。

この主要地域は、南部アパラチア地方綿作地帯の或る小作地域及び若干の南部海岸の居住地域であることがわかつた。

概略的に云えば、地方的差別出生率の研究の二つの主要な方法は、統計的及び文化的なものと思われる。我々の目由になる此の短い紙面で我々は南東部の特別の高出生率の在所を見付け、統計の方法がこの地方を合衆国全人口と区別することに役立つ限界を示そう。本文の第二部は高出生力複合の文化的内容の考察に捧げられるのが良いだろう。

第一部　人口学的様相

人口学者は、南東部の高出生率が、その地域の特殊事情に関聯せしめられ得る限度、一九二〇年より一九三〇年えの出生率低下が、どれくらいこれらの事情における変化に負つているかという程度および死亡率が、現在潜在的出生の上に有する效果について興味をもつている。これに加うるに我々は、この地方の比較的の多産率、婚姻の予想表および一九三〇年代の変化がどの位移民及び自然増加に負うているかの程度を計算した。

南部の特別の高出生率の要因

何が南東部の特別の高出生率に責任があるのか。この地方の住民は、かれらがより辺鄙的であるために、かられが、より年が若いために、或は彼等の人種的構成のために高い出生率を有するのであろうか。南部の出生率が、これらの要因に依らないことが判る限りは、それは全く一定年令の婦人が、より多くの子供を持つ傾向、即ち、高い年令別特殊出生率に基くにちがいない。

南東部の出生率に影響するすべての要因が、全国人口に於けると同一に保たれる場合、それは量に我々が合衆国全人口をそのすべての特殊出生率を変えないで、南東部の規格にまで編めることを意味する。もし、一九三〇年にこれらの四要因が、この地方においても全国と同様であったなら、南東部の出生は（第一表）八二、七六〇人 ― 一四・六％ ― 減じたであろう。

人種の分布における全国の比率は、南東部全出生をわずか〇・五％減ずるに過ぎない。都鄙別居住[3]においては二・五％を、年令別においては三・二％減ずるであろう。そこで年令別特殊出生率は四七六九一人即ち総数の八・四％の減少に責任を有する。

かくの如くにして、この地域の特別に高い出生率の半分以上は、全く ― 人種・辺鄙・年令の差異に関係なく ― この地方の婦人のより多くの子供を持つ傾向に基くことがわかる。合衆国全人口の人種・都鄙・及び年令分布の特徴が与えられれば、南東部の出生はわずか六・三％しか減少しないであろう。この高い特殊出生率はこの地方における家族制度の実行における遅れの指標としてとり得るだらう。

註(3) 都市人口は、此処では動態統計報告と同様・人口一〇、〇〇〇若くはそれ以上の都市の人口を意味している。

第一表　1930年における合衆国全体におけると同一の條件の假定の下で南東部における出生数を減少せしむる要因の重要性の比較

項目	合計		白人		有色人種	
	実数	%	実数	%	実数	%
南東部出生実数	567,434	100.00	371,026	100.00	176,408	100.00
推計出生数（合衆国と主要因が同一として）	484,674	85.42	428,131	109.49	56,543	32.05
四要因に基く出生数の減少						
合計	−82,760	−14.58	37,105	9.49	−119,865	−67.95
1. 合衆国に於けると同一の年令別特殊出生率	−47,691	−8.40	−39,329	−10.06	−8,362	−4.74
2. 合衆国に於けると同一の都鄙分布	−14,038	−2.48	−14,106	−3.61	18	0.01
3. 合衆国に於けると同一の年令構成	−17,847	−3.15	−14,625	−3.74	−3,222	−1.83
4. 合衆国に於けると同一の人種構成	−3,134	−0.55	−105,165	−26.89	−108,299	−61.39

地域的多産率

南東部の特別の高出生率は、ロトカおよびパークスにより考案され、ウエルプトンおよびジャクソン[4]により発展せしめられた方法に従って多産率を計算することによって示すことが出来る。

第二表は合衆国全体及び南東部に対し、当時の出生率および生命表に基づく出生数別の妻のパーセンテージ分布を指し示している。一九三〇年において、我々は、全人口にあっては子供数三人乃至それ以下の白人の妻の割合が他を凌いでいることを発見する。南部における白人の妻はそのわずか六五・四%が三人若くはそれ以下の子供を持っているにすぎない。これに対し全国におけるその割合は七四・六%であった。両地域共一九二〇年より一九三〇年にかけて、小家族の割合の甚だしい増加を示している。そしてその最大の増加は、出生数ゼロの階級においてである。一九三〇年においては、全国の妻二三・

第二表　1919～1921年及び1929～1931年の合衆国及び南東部における白人の妻の多産率

註　多産率は当時の出生率・婚姻状態及び生命表に基づく出生数別の妻の百分率分布を示しているものである。合衆国についての多産率は P.K. Whelpton によって計算された，総ての出生は過少登録に対して補正されている。公生出生のみが考慮されている。1929～31年の南東部の率は1930年の出生の状態を基準にして計算された。

出生率	1919～1921		1929～1931	
	合衆国	南東部	合衆国	南東部
0	12.0	9.5	23.1	19.1
1	20.6	14.1	20.0	17.8
2	17.7	14.0	19.4	17.8
3	13.8	13.4	12.1	10.7
4	10.2	8.8	7.7	8.0
5	6.8	7.7	4.9	6.0
6	5.0	6.9	3.6	4.7
7	3.8	6.3	2.4	3.9
8	3.1	5.3	2.0	3.3
9	2.3	4.9	1.5	3.2
10人及びそれ以上	4.7	9.1	3.3	5.5

一%、南東部の妻の一九・一%が出生無しである、六人若しくはそれ以上の出生の割合においては、南東部地方は白人の妻が二〇・六%を示しているが、これに対し全国におけるその割合は一二・八%である。南東部における白人と黒人の妻の間の多産の分布の比較（第三表）は、黒人私生児の高率のため困難にさせられている。それは一九三〇年には全出生の約一三%に達している。私生児出生は、第一子に最も多い。しかし、これらを計算に入れても遥かに高い割合の黒人の妻は一人乃至〇人の子供しか持っていない様に見える。第三表は、白人の婦人の一九%に対し、黒人婦人の二七%が無子であり、又、白人婦人の一七・八%に対し黒人婦人の二八・八%が一子であることを示している。

第三表　1919～1921年および1919～1931年における出生率および生命表に基く黒人の妻の多産率（全出生を含む）

出生数	1919～1921	1929～1931
0	18.1	27.0
1	22.7	25.8
2	9.0	10.9
3	6.7	6.2
4	7.0	4.2
5	4.8	4.2
6	4.3	3.8
7	4.0	2.9
8	4.3	2.9
9	2.7	1.8
10人及びそれ以上	9.4	7.3

註(4)　ウェルプトンおよびジャクソン著、登録地域に対する出生表に基く白人の妻の多産分布、「人類生物学」一九四〇年二月号参照

婚姻の豫想確率

人口の高出生率は、屢々指摘される如く、高い頻度の婚姻と若年令の婚姻に伴う、我々の計算（第四表）は、南東部の婦人が生命表の用語で云えば、高い婚姻の予想確率をもっていることを示している。一九三〇年におけるこの地方の生残率および初婚率に於ては、我々は出生時においては白人の女

第四表　1930年の婚姻状態および1929～1931年の死亡率に基く南東部の白人婦人についての婚姻稼働確率

年令 X.	X歳における女子の生存数 (1)	X歳における婚姻百分率 (2)	X歳における既婚の生存者数 (3)	XよりX+5の期間の既婚者の死亡数 (4)	XよりX+5の期間の初婚数 (5)	X歳までの婚姻累計数 (6)	X歳における未婚の生存者数 (7)	X歳における婚姻稼働の確率 (8)
0	100,000	0	0	0	0	83,301	100,000	83.3
5	92,975	0	0	0	0	83,301	92,975	89.6
10	92,273	0	0	0	0	83,301	92,273	90.3
15	91,751	0	0	186	42,032	83,301	91,751	90.8
20	90,972	46.10	41,946	933	26,549	41,269	45,926	84.3
25	89,236	75.60	67,462	1,417	9,726	14,720	21,774	67.6
30	87,505	86.59	75,771	1,807	3,398	4,994	11,734	42.6
35	85,473	90.51	77,362	2,050	930	1,596	8,111	19.7
40	83,324	91.61	76,242	2,326	465	666	6,982	9.5
45	80,626	92.12	74,321	2,813	201	201	6,305	3.2
50	77,582	92.43	71,709					

性の人三・三％が生存して結婚をすると見積っている。黒人に対する同様の計算は七七・九％という率を示す。これらの率は一部分はこれら女性が婚姻年令に達する前に死亡が徴収するところの通行税

のために低くなっている。最も高い点即ち白人については一〇才、黒人については一五才では、白人については九〇・八%、黒人については八八・五%の初婚予想確率となる。この年令を過ぎると率は低下してゆき、四十五才で未婚のまゝ残された婦人は余り結婚を期待できないようになる。即ち我々の計算に基づけば、四十五才の未婚黒人婦人の一七・九%および未婚白人婦人の三・二%が結婚するだろう。合衆国全人口に対する婚姻予想確率は今のところ計算されていない。

一九二〇年—一九三〇年の出生低下

ダムソンおよびウェルプトンにより発展された方法に従い、我々は一九二〇年より一九三〇年に至る南東部の出生低下に関聯する諸要因の影響力を測定せんと試みた（第五表）。統計学的にはこれらの要因は、人種・年令・性別構成、都鄙別・居住及び特殊出生率に分離できる。年令別特殊出生率における低下は、人口構成における他のすべての変化よりも一層重要なものと認められる。一九二九年—一九三一年に発生した六四一・六八九の出生は一九一八年—一九二一年の出生の八八・一%になる。しかし下らこの出生の二〇%は一九三〇年度人口が一九二〇年度より増加していることに基く。年令＝体性別構成における変化は出生における二・二%という僅かな増加に対して実際有利に作用し、一方都鄙別分布における変化は僅か一・六%の減少の理由にしかならなかった。かくの如く、南東部の全人口にとっては特殊出生率における低下が一八〇、八〇三の出生の減少、即ち一九一八年—一九二一年の水準より二八・八%の低下の原因をなしていたのである。

全人口については、人種別構成の変化は、実際には何等相異を来さない。白人人口のみを分離して考えれば、それは出生において四・三%の増加を意味し、黒人人口では八・六%の減少を意味する。都鄙別分布における変化は、出生において一・五%の減少—即ち白人については一・五%、黒人については

第五表　1920年より1930年に至る各種要因の変化を考慮した南東部における人種別出生数の実際の相違とその内訳

項目	合計		白人		黒人	
	実数	%	実数	%	実数	%
1918～1921年の出生数	729,083	100.0	490,667	100.0	238,416	100.0
1929～1931年の出生数	641,689	88.1	441,360	90.0	200,329	84.0
1920年から1930年までの出生数の実際の変化（五要因が1930年と同一として）	−87,394	−11.9	−49,307	−10.0	−38,087	−16.0
(1) 1930年人口と同一規模にしたため	89,021	12.2	59,910	12.2	29,111	12.2
(2) 1929～1931年の年令別特殊出生率と同一にしたため	−180,803	−28.8	−134,324	−27.4	−46,479	−19.5
(3) 1930年と年令・性別構成を同一にしたため	15,848	2.2	11,605	2.4	4,243	1.8
(4) 1930年と都鄙別分布を同一にしたため	−11,859	−1.6	−7,401	−1.5	−4,458	−1.9
(5) 1930年と人種構成を同一にしたため	399	0.05	20,903	4.3	−20,504	−8.6

註）この方法は、トムソンおよびウェルプトンの『合衆国における人口の趨勢』283頁から採用された。

一・九%の減少を意味するのみである。年令性別分布の変化は、両人種双方の出生増加即ち白人人口にあつては二・四%、黒人人口にあつては一・八%の出生増加を助けている。白人については、年令別特殊出生率における低下は出生の大きい減少、即ち一九二〇年に対し黒人が一九・五%の減少であるのに、実に二七・四%の低下の原因になつている。黒人は可能的な出生のより大きい減少、即ち、白人における一〇%に比較して一六%のより多い減少を蒙つている。黒人の出生減少の一部分は地域的人口移動に帰することが出来る。というのは黒人は人種分布の変化により一九二〇年出生の八・六%を失つたからである。これに対し白人は四・三%の増加を来したのである。

いくつかの結論がこの分析より現れる。特殊出生率が人種・都鄙居住・年令性別構成に関係なく、南東部の高い再生産の困難であることは事実である。南東部は他の測定し得る人口学的社会的特性によつて説明される以上の出生力の差異をもつている様に思われる。収入程度別、特殊出生率の計算は、もしそれが可能なら、この差異の多くを説明するだろう。又特殊出生率の低下は一九二〇年から一九三〇年えのこの地域における再生産を減ずることにおいて他のすべての変化より重要性をもつていることもまた示されている。これらの数字は、後に見る如くこの過程一九三〇年―一九四〇年の期間にも継続したことを示している。

一九二〇年及び一九三〇年における南東部の出生率に及ぼす死亡の影響

南東部の出生に及ぼす母の死亡の実際的および潜在的な影響は何か。一五才より五〇才までの姙孕年令婦人における死亡のために生じた、得りうべかりし出生の減少は非常に少く、一九二九年―一九三〇年の期間の全出生の一%以下である。かくして出生の最大の損失は一五才以下の婦人の死亡、大部分は乳児死亡より生ずる。第六表は一九二九年―一九三一年の出生率および死亡率に従えば、出生か

第六表　1929～1931年及び1918～1921年の南東部に於ける実際の出生数および出生より再生産期の終りまでの婦人の死亡により一ケ年間に失われた出生数

期間及び年令階級	白人		黒人	
	実際出生数	損失出生数	実際出生数	損失出生数
1929～1931				
15～19	63,545	6,086	47,373	7,750
20～24	133,909	14,812	63,751	13,486
25～29	107,722	14,190	40,505	11,199
30～34	70,504	11,022	24,630	8,771
35～39	47,177	8,760	17,808	8,045
40～44	16,763	3,700	5,347	3,074
45～50	1,740	460	915	676
合計	441,360	58,030	200,329	53,001
1918～1921				
15～19	58,644	8,474	48,486	11,196
20～24	140,329	23,836	73,615	22,388
25～29	122,014	25,026	51,019	20,316
30～34	84,896	20,880	30,267	15,509
35～39	61,107	17,781	25,456	16,358
40～44	21,303	7,230	7,807	6,204
45～50	2,344	912	1,766	1,765
合計	490,667	104,139	238,416	93,736

ら五〇才までの白人婦人の死亡により引起された処の出産における一ケ年間の差異は五九〇三〇人―即ち一九三〇年の実際人口における年間出生の一三・四%の減少に等しいことを示している。一九一八年―一九二一年については、その減少は更に大で一〇四、三九名即ち実際出生の二一・二%であった。黒人婦人の死亡は、更に一層高い通行税―即ち一九二九年―一九三一年においては年間出生の二六・五%、一九一八年―一九二一年の三九・三%を強請したのである。

これらの計算をこの地方の出生率に関係させてみることは興味があろう。一九三〇年―一九二九年―一九三一年の平均出生数）の実際の出生率は二九・四であったろう。一九三〇年（一九一八年―一九二一年の平均出生数）には実際の出生率は全人口に対し三一・九であった。もしすべての母が〇才から五〇才まで死亡から免れていたなら出生率は人口一、〇

〇〇対四〇・五であったろう。これらの対照的数字は南東部の一九三〇年より一九三〇年に至る低下せしめられた死亡率と低下せしめられた出生率の二つの傾向を組合せたものであることは明らかである。これらの計算は我々を重要な結論へと導く。南部が全国ともっと似て来るにつれて、その出生は減少するだろう。しかしその健康状態が向上するにつれ、出生は多分増加するだろう。そこでこの集団に対する避妊は問題として益々重要になるだろう。

一九三〇年―一九四〇年の地域的変化

自然増加対移住

移住と自然増加の二要因の間に最近の人口変化を配分することは、現在可能である。国勢調査の数字（第七表）は一九三〇年から一九四〇年の間に南東部はその人口を一〇・一％―極西部を除く他のすべての地域を凌駕する率―増加したことを示している。南東部の二・七一〇・九三一人の増加は全国最大であり、全国の総自然増加の三〇％以上を構成している。

地域的変化を自然増加および移住の構成要素に還元してみると、全国に於て何が起りつゝあるかが判明しよう。一九三〇年―一九四〇年の十年間に於ける死亡に対する出生超過を控除すれば、極西部のみが移住による評価し得べき増加（一五％）を示した唯一の地域であることを示している。極西部を除くすべての地域の主要な増加は自然増加より生じているが、この点において南東部を抜きんでいる地域はない。

南東部は死亡に対する出生の差額によって二・七五〇・三九二人の新人口を獲得し、外部えの移住によりわづか三九・四六一人しか失わなかった。

出生および移住における変化傾向は、これらの実際的変化と、トムソンおよびウエルプトンへ第八表により、(1)移住無き場合、(2)一九二〇年―一九三〇年と同様の移住の場合の二つの仮定の下に推計

第七表　全国および六地域別 1930～1940年の10年間の人口における総変化，自然増加および移住運動

地域	総変化		自然増加		移住運動	
	実数	率(1)	実数	率(2)	実数	率(1)
合衆国全体	8,894,229	7.0	8,120,596	6.4	773,633	0.6
北東部	1,940,298	5.0	1,746,995	4.5	193,303	0.5
中部	1,780,130	5.1	1,866,716	5.4	−86,586	−0.3
南東部	2,710,931	10.1	2,750,392	10.2	−39,461	−0.1
南西部	702,692	7.5	863,653	9.2	−160,961	−1.7
北西部	25,938	0.4	635,269	8.6	−609,331	−8.2
極西部	1,558,018	17.2	228,539	2.5	1,329,479	14.7

(1)　人口1000についての年平均の率

された変化を比較することによって示し得る。

一九二〇年―一九三〇年の十年間に見られたような州間移住の型は、一九四〇年台に持越されていない。移動の「予想」がピッタリ合った地域は南西部のみで、実際の減少一六一〇〇〇に対し、「予測」減少一八九〇〇〇であった。極西部については、実際の移住数が仮定移住数を二四二、〇〇〇人も上廻り、北西部では、仮定の対外移住を一六一〇〇〇超過した。北東部は九一、二〇〇〇の増加を仮定されていたが、わずか一九三、〇〇〇しか増さなかった。中部諸州は三一八、〇〇〇増加を仮定されたが、反対に八七、〇〇〇以上減少した。南東部は一九二〇年―一九三〇年の状態から仮定された対外移住よりも一六六七、〇〇〇人少くなっている。

自然増加（第八表）に示された処の地域的対照も同様に著るしい。低出生率の諸地域たる北東部、中部諸州及び極西部等は自然増加において仮定された以上に増加している。高出生率の諸地域たる北西部、南西部、南東部等は自然増加において、トムソン・ウエルプトンの予測で期待された以上に大きな低下を示している。若し対外移住が一九二〇―一九三〇年に得た高さに達したなら、

第八表　合衆国全土および六地域別 1930～1940年の10年間の人口実際変化および二つの仮定の下に推計された変化

（1000人単位 人口数）

假定 (1)　移住なしとした場合
假定 (2)　移住ありとした場合

項目および假定	合衆国全土	北東部	中部諸州	南東部	南西部	北西部	極西部	D C
1930年人口	122,775	38,026	33,961	25,551	9,080	7,385	8,285	487
1930年人口 1)	123,223	38,153	34,077	25,670	9,118	7,412	8,312	488
1940年人口								
実際	131,669	39,966	35,742	28,262	9,782	7,410	9,844	663
假定 (1)	132,098	39,853	35,940	28,908	10,278	7,137	8,500	488
假定 (2)	131,865	40,754	36,215	27,069	10,068	7,656	9,586	513
総変化（1930～40）								
実際	8,894	1,940	1,780	2,711	703	26	1,558	174
假定 (1)	8,865	1,700	1,863	3,238	1,160	725	188	0
假定 (2)	8,632	2,601	2,138	1,399	950	244	1,274	25
自然増加（1930～40）								
実際	8,121	1,747	1,867	2,750	864	635	229	29
假定 (1)	8,865	1,700	1,863	3,238	1,160	725	188	0
假定 (2)	8,632	1,689	1,820	3,105	1,139	692	187	0
移住による増加或は減少（1930～40）								
実際	774	193	−87	−39	−161	−609	1,329	145
假定 (1)	0	0	0	0	0	0	0	0
假定 (2)	0	912	318	1,701	−189	−148	1,087	25
変化の年平均率								
実際	7.0	5.0	5.1	10.1	7.5	0.4	17.2	30.3
假定 (1)	6.9	4.4	5.3	11.9	12.0	9.3	2.2	0.0
假定 (2)	6.8	6.6	6.1	5.3	9.9	3.2	14.2	5.1
自然増加の年平均率								
実際	6.4	4.5	5.4	10.2	9.2	8.6	2.5	5.0
假定 (1)	6.9	4.4	5.3	11.9	12.0	9.3	2.2	0.0
假定 (2)	6.8	4.3	5.2	11.8	11.9	9.2	2.1	0.0
移住の年平均率								
実際	0.6	0.5	−0.3	−0.1	−1.7	−8.2	14.7	25.3
假定 (1)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
假定 (2)	0.0	2.3	0.9	−6.5	−2.0	−6.0	12.1	5.1

註1）この人口は1930年4月1日調査されたものを5才以下の子供の過少計算に対し4%の水増しすることによつて訂正した。假定はこの人口によつた。一方実際の変化はセンサス人口によつた。

南東部は三、一〇五、〇〇〇の自然増加を示すことを期待されたのである。しかし実際の増加はわずか二、七五〇、〇〇〇であった。かくして人口一〇〇対一一八の予期された年平均自然増加率は一〇・二に下った。南西部においては一一・九の予想率が実際の率では九・二となった。極西部では予想から実際の率えの変化は二・一から二・五えであった。北西部では九・二から八・六えであった。我々は、トムソン、ウエルプトン推計の基をなす仮定を検べることによって、これらの変化の理由を説明できる。トムソンおよびウエルプトンは、合衆国全体としては、五支階級別出生率が一九三〇年より一九六〇年迄に約三〇%低下し、一九六〇年には「合衆国全体の出生率と各州の都市および郡部人口の出生率との間の差異は、一九三〇年の差異の二分の一の大きさになるだろう。」と仮定した。

一九四〇年の数字から二つの傾向が明らかに見られる。即ち、(1)低出生率の州においては、その出生率は仮定された程急速に低下していないし (2)高出生率の州においては仮定された以上の高い割合で低下しているのである。

第二部　文化的研究

多くの研究者は、地域的高出生率研究の統計的方法は現象の理解或は社会政策の履行に必要な科学的解釈の水準に達しないで留まっていると感ずるに違いない、しかし乍ら、実際には地方民衆の間の高出生複合(コンプレックス)の文化的研究は甚だ少い。そして今までに出版されたどの試みも、文化的研究のために人類学によって創設された軌範をまもっていず、また動機および態度の研究のために社会心理学によって作られた規範を満足せしめるものはないと云ってもよい位である。

この様な研究が直面している明瞭な困難を認めた上で、我々はこの分野における理論と方法につい

ての二つの未解決の問題を充分討議してもよいであろう。その第一は、家族の大きさによって影響されるような実際の生活水準（*actual level of living*）に対して生活基準（*standard of living*）として知られたかの文化複合（コンプレックス）がどういう関係をもっているかということを問題にしなければならない。此処で我々は過度の出生率をもつ人々が、どの程度まで実際の生活水準より高い基準をもつかについて充分に調べ得る。その第二の問題は、何故基準が家族制度の実行の中まで行き渡るようにならないかという理由を調べるとき理解される。この傾向は、又、文化複合（コンプレックス）の問題としても採上げられねばならぬ。それは必然的に夫婦関係に於ける性行為に対する民衆の態度の考察に導く。

生活の基準

この議論においては、生活基準および出生力の型に関する現象は、文化的および個人的の両観点から考察し得るということが既に主張されなければならない。智能および文化的平等の相違に基く個人的差異があることは予想しうる。しかし比較的孤立した民衆的、地域的および階級的集団の中にあっては、これらの同質的（ホモゲニアス）社会を包む延の形式上の態度が見られる。同質性ということは、基準が二つの方法、即ち、一つは、交通聯絡によって知らされる処のもの、他の一つは、経済状態によって得られる処のものに限定せられるが故に、かゝる地域に広まるらしい。小作人家族は(1)もし彼等の生活範囲に *peasants*（註参照）がいなかったら、或は(2)もし彼等が出遇った *peasants* が全然手の届かぬ基準をもっている場合、この *peasants* と肩をならべることに殆ど関心を示さないだろう。かゝる民衆においては労働者は彼の同僚と同じ位の財産をかせぐまでしか結婚を延ばさないし、出生力は殆んど或は全然制限されないだろう。

文化的観点が附け加わってくる場合も更に探究することが出来よう。この分野における実地調査研究のすべての結果は、避姙法というものが周知の民間的方法も含めて家族制限の手段乃至機構にすぎ

ないことを教えている。それらを用うる動機は、多くは或る生活標準を獲得したり維持したりしたらという家族の欲望から生ずるにちがいない。此処において、我々は通常の思慮深い産児制限には殆んど無関心でかゝる手段を用いない様な人々に関心を持つスライツクスおよびノートシュタインが「広く知られた知られた通俗的な方法さえ自由に利用しようとしない人々に対して、單に近代的避妊具を利用できるようにすることだけでは、この状態は急速には変えられない。其処には、出生力を減少せしめようとする意志もまた存しなくてはならぬ」と指摘していることは正しい。（註）Jones 地主？

これまでの処、我々の分析は、低い生活水準と高い出生力との結び付きを示してきたが、しかしこの結びつきを価値や生活態度という側面から、即ち、これらの集団の生活基準の文化内容という側面から説明していない。かくの如く受胎調節行為の実行は、單に効果のある技術の受入ればかりでなく新しい価値の導入と新しい態度の採用を意味しているのである。

普及している態度の構造は、生活基準の文化的内容の中に見出される筈である。もし生活基準と生活の実際の水準の区別が正当であるとすれば、この区別は家族制限の広く知られた通俗的方法やその他の方法が何故もっと広く行われないかを決めるのに価値があろう。

問題は生活基準と実際の生活水準の区別を明らかにする様なやり方で提出されるだろう。例えば、人が自分の実際の生活水準の向上を先づ経験することなしに、生活から期待する処の基準を高めるようになることは可能であろうか。我々は屢々このことが向上の意志を持つ人によって達成されるので集団についてもこのような質問を提出することが不必要であると感じ勝ちである。

この質問は、集団というものは、多くの人が文化的経験以外の或る物から、その集団の立っている状態の文化的規定をかき集めるものだということを暗示している。

意志をつくり出すところの経験は、かくの如く、代償的であり、象徴的であり、動態的なものであ

る。

具体的には、生活の実際水準対生活基準の計算は、貨幣経済に於ては家計予算のバランスを見るという略式の方法によって最も良く行われる。アパラチア地方の居住地域および南部小作地域の信用および「給与」の組織は、大部分我が貨幣経済の現金の運鎖の範囲外に残されていることが想起されなければならない。このことは大家族の経済状態に関連して特に真実である。子供の出産の最初の費用や生れない前の世話は、産婆の最小限の奉仕や、近所隣りの援助によって充される。都市居住者に対して強要される処の費用勘定や予想の方式は大部分避けられ、農村の家族に子供数が増えるにつれ、徐々にその姿を現わすに過ぎない。仕払い延期や金無しですませることは、増加して行く家族について、はっきりした計算をすることもないような農村地域の低い生活水準の中に普及する。このような文化においては子供のためになされることは少く、而も協同的農場仕事や家族労働において子供に期待するものは多い。――これは都市生活者のなし得ない逃避である。

例えば、我々は、これらの集団のあるものの中に除々に侵入しつゝある高等学校教育が、これら低水準の人々に対し、一体何をなすかを質わたい。かゝる開化は基準を上げ、出生力を下げるよう作用し、次いでこれらの傾向はやがて収入増加と生活水準の改善ということになると通常想像されている。我々は集団の生活水準を引上げるために多くの運動を行っている。しかし収入を増そうと試みずに、人々の基準を上げようとする運動から如何なる出来事が生ずるだろう。

革命技術の一つが、すぐに得られるという合理的な希望以上に人々の期待や基準を引上げようとする試みの中に発見されたということが指摘されている。その結果として生ずる緊張がやがて反抗の動機を提供するように思われる。経済の分野では、これは、経験事実に基くことなく宣伝や教育に根ざす代償的、象徴的経験に基いた文化的地位の変化を意味するだろう。

これとは反対に実際の生活水準の低下は、高い生活基準を得んとする試みが民衆の中に実現しえなかつたところの仕方で出生を制限する様作用する。これが無根な理論でないことはアイルランドの一例によつて示されている。多くの人の生存を脅かしたというよりも、寧ろ破壊さえもした恐ろしい飢饉がその国に世界最低の婚姻率を与えたのである。アイルランドはマルサスの忠告「道徳的抑制を伴う晩婚」の実行に従つた一つの国である。カール・ソーンダースは一八四一年から一九二六年までに年令二十五才より三十五才に至る未婚女子が二八%から五十三%に増加したことを示している。結婚した女子については、年令別特殊出生率は少しも低下しなかつた。アイルランドがマルサスやカトリック教会に従つて達成した処のものを他の人々は自分の生活標準が脅かされた場合、家族制限によつて行つている。而し、未だ生活や信用経済における基準を上げようとする熱望によつて受胎調節法の実行を用いる様になつていない処の社会的に孤立した山村や住民や、農村の黒人や農業小作人達も、彼等が都市に移住した場合には、家族制限を受入れるのである。彼等の現在の低生活水準をひどく脅かすものがあれば、それは又、出生を減ずるだろう。

T・J・ウーフターの研究によれば、一九三〇年には、農家人口における青年の数は、農業における人口の置換えに要する数の丁度二倍程あることを示している。農家青年の人口過剰は農業の機会が最も少い地域に最も大きい。もし次の二十年の間に死ぬべき農家の働き手のほかに、さらに六十五才に達するすべての農夫が引退したとしても、彼等が空け渡す農場はわずか二百七十万の農夫に対する余地しかないであろう。しかしそれと同じ期間に、現在農場で生活している六百万の少年は二十才に達するだろう。

もし、彼等が皆農業に従事しようとするなら、利用し得る農場一〇〇に対し二二五人の青年が競争するわけになる。南東部においては、これと同じ計算をすれば一〇〇に対し候補者三〇〇人の割合と

なる。特に南部アパラチア地方では農場一〇〇に対し凡そ三五〇人の割合になる。

棉花栽培の膨脹した時代においては、資本と経験を欠く農家青年でも小作人の低い水準において結婚にも農業従事にも入り得た。しかし今日は、これらの機会は閉ざされており、農場小作人の免私や組織の崩壊の脅威がアイルランドの貧農の状態とのある類似を示唆している。この様な烈しい変化が予想以上の速度で結婚を遅らせ、出生率を押下げるよう作用するだろう。

(註) ステイシスおよびノートシュタイン　制限された出産力　一九四〇年

性的態度

性生活は経済生活に劣らぬ動機をもっている。夫婦関係における民衆の性的態度については、これまで以上に論議されねばなるまい。農場小作人の母についてのマーガレット丁ハグッドの研究の功績の一つは、これら民衆の間にあっては、この関係が夫婦間で屢々話し合われることがなく、又その上に議論に用いられる科学的客観的用語が何ら存在しないことを示したことである。

ハグッド女史は、現在以上の子供数を欲しがらないという一般的態度には彼等の堕胎を防止することを目的とする一般的実行が伴わないことを発見した。質問を受けた六十九人の小作農家の母の中わずか八人が避妊法を使用していたのみである。それにも拘らず四十二人中三十七人迄が産児制限に賛成の意見を吐いている。女史は「医師は貴方にこれ以上子供を作らぬように言うが、作らない為には何をなすべきかは話したがらない」との共通の不平を発見した。十四人の母は何をなすべきかを直接尋ねた。

農家の母の側におけるこの態度は、反抗でもなく、さりとて思慮ある支配でもなく、むしろ絶望的あきらめの態度である。反抗は、普通の道徳や宗教や、又愛情と義務を感ずる自分の夫に対する否定

的態度を意味するだろう。用心深い行為というものは、この民衆の妻に要求しうる以上の夫婦関係に対するより多くの支配を意味するだろう。用心深い行為というものはこの民衆の妻に要求しうる以上の夫婦関係に対するより多くの支配を意味するだろう。ここでは婚姻に於ける相互作用によっても解きほぐされない男女の二元的対立の事実に直面せしめられる。家長制文化においては、家族制限のこれらの問題を考慮することは、大部分、性関係における男性の攻勢と優越という見えざる要素の故に不問に付せられる。家族制限の広く知られた通俗的な方法は用いられず、妻の苦悩に基づく技術的方法は弘まらない。こゝに於て我々は、ハグッド女史によって研究された母の態度に匹敵すべき夫の性や出産についての態度について知ることが必要になる。

然し乍ら、男性の支配は経済状態および生活基準についての我々の上記の論議の妥当性を認めるならば、そう大きな役割はしていない。人は夫にあっても愛慕と快楽の動機の間の争闘が、妻の場合と同様に一体の合理化を含んだあきらめを生ぜしめていることを発見するであろうことは疑いない。しかし、かゝる態度を暴露せしめることはより以上に甚だしく困難である。

今にして思うと初期の産児制限運動は快楽原則には殆んど或は全然制限を設けないで理想的避姙法などといった極めて楽観的な主張であった事が判った。我々は今や「リビドー」が思慮深い抑制の支配下にもたらされるものだということ、そして又このような民衆の行為を動機づけるものは改善された生活水準によって強化されるところの経済圧力でなければならない事を知る。公衆衛生計画における避姙相談所の地位については、多くの悪が云われている。私は又一層よい出産前および出産時の看護の普及に捧げられる公衆衛生計画は、しし苟し経済的関係において完成されるなら民衆の生活基準を高め、かくして出生を低めるに大いに役立つことをも附け加えたい。上りつつある生活基準の影響の下で各々の子供に一層の注意が払われれば払われる程、如何なる文化団体の家族も一層子供を少く持つだろう。

(註) マーガレット・ハグッド　南部の母親達　一九三九年